

# 男性のためのジェンダー入門

池谷壽夫 (了徳大学)

2020.7.25

# はじめにー 世界の中での日本のジェンダー

世界経済フォーラム「Global Gender Gap Report 2020」「ジェンダー・ギャップ指数」で日本は153か国中121位（前回は149か国中110位、2006年115か国中80位）

\* 「ジェンダー間の経済的参加度および機会」「教育達成度」「健康と生存」「政治的エンパワメント」の4種類の指標でランキング

- 読み書き能力、初等教育（小学校）、出生の男女比の分野では、昨年同様1位。
- 中等教育（中学校・高校）、高等教育（大学・大学院）、議員・政府高官・管理職、専門・技術職、国会議員数では、世界ランクがいずれも100位以下。
- 中でも、「政治的エンパワメント」が低く、閣僚数で139位。国会議員数でも135位。
- 経済分野では、賃金格差が67位、労働力参加率79位、推定勤労所得108位。にもかかわらず、「ジェンダーバッティング」が根強くある。

GGI(2020)  
上位国及び主な国の順位

順 位	国 名	スコア
1	アイスランド	0.877
2	ノルウェー	0.842
3	フィンランド	0.832
4	スウェーデン	0.820
5	ニカラグア	0.804
6	ニュージーランド	0.799
7	アイルランド	0.798
8	スペイン	0.795
9	ルワンダ	0.791
10	ドイツ	0.787
15	フランス	0.781
19	カナダ	0.772
21	英 国	0.767
53	米 国	0.724
76	イタリア	0.707
81	ロシア	0.706
106	中 国	0.676
108	韓 国	0.672
121	日 本	0.652

分 野	スコア(順位)	昨年のスコア(順位)
経 済	0.598(115位)	0.595(117位)
政 治	0.049(144位)	0.081(125位)
教 育	0.983 (91位)	0.994(65位)
健 康	0.979 (40位)	0.979(41位)

# 1 議論の基本的的前提

(1) 「多様な性とジェンダー(sexual and gender diversity)」の存在

○脱男女二分法 Gender Rights - Sexual Rights - Womens Rights

○しかし多様性の名のもとに、現代資本主義は人種、、障害、性自認・性的志向に関わりなく、あらゆる人々の能力の搾取

(2) 現代資本主義は資本のシステムと「〔ヘテロ〕セクシズム」（竹村和子）を含んだ「ジェンダー秩序」とを統合したものとしてある。

この限りで、男性はどの位置にいようとも、基本的には今日の資本主義社会においては、女性に比して「ジェンダー秩序利益配当」（男であるだけで社会文化的・経済的に得をしていること）を何がしか得ている。

### (3) 新自由主義政策のなかでのジェンダー問題

○ネオリベは非市場的なもの・社会的なものを破壊し、そのかわりに企業・起業家精神を持った個人（起業家entrepreneur）、企業的個人をあらゆる個人に要請する。

—自己責任で自己ケア（例えば健康の維持やスキルアップ）し、問題解決することができるエンプロイビアリティ（雇用される能力）のために、自己実現を目指し、自己をたえず啓発し、自己統治すること（自己の時間や健康管理や感情のコントロールをも含めた）が求められる。

○しかし同時に社会の安定を図るために、企業的な個人を背後から支える、他者に対するケアや自己犠牲的なボランティア精神といった非市場的な共同体倫理や保守的な家族を必要とする。

⇒「**ネオリベラル・ジェンダー秩序**」「**新自由主義的母性**」=社会的労働の場面でも、社会的再生産の場面でも、企業的な個人として家族と自己を統治する母親

## 2 「男性の危機」？

欧米でも日本でも、「トラブルとしての男子・男性」「男子＝敗者論」、「弱者としての男子・男性」「男子・男性の危機」が、ジェンダー平等政策が進展するにつれて、2000年頃から叫ばれ始めている。

- (1) 男子の学力低下が問題化され、「できない男子」、「男子はなぜ女子より劣るのか」（『ニュースウィーク日本版』2006年2月15日号特集タイトル）が論議されている。
- (2) 親密圏における男子・男性の暴力（性暴力、DV、セクハラ、デートDV、Sexting等）の顕在化
- (3) ジェンダー平等政策の一定の前進の下での男子・男性のルサンチマンの増大—既得権の喪失に伴う「剥奪感」と被害者意識、男性の権利の主張（「女性中心的な社会」「女災社会」）

### 3 産業構造の変化と「男性＝危機」

#### （1）産業構造の変化

大量生産・大量消費を基調とした製造業を中心とした大工業（フォーディズム）から知識情報・サービス中心の社会（ポスト・フォーディズム）へ

○産業構造の変化に伴い、いわゆる「男性」向きの労働需要が減り、「女性」向きの労働（ケア労働や感情表現やコミュニケーションを必要とするサービス労働）需要が増えていく。

ただし後者の労働は非正規労働が多く、賃金格差は変わらない。

## (2) 雇用と生活の不安定化＝戦後の「男性青年期」の解体

### 1) 大企業を中心とした男性稼ぎ手モデル（性別役割分業）

《誕生→学校→企業（結婚・出産）→退職→死》の比較的安定した人生モデル

- 終身雇用
- 年功序列
- 日本型能力主義（生活態度として能力主義＝企業への忠誠度）
- 企業内教育（On the Job Training）＝企業内で青年から大人へ
- 企業内福利厚生
- 男性＝仕事（ケアレスマン）、女性＝家事・育児＋〈仕事〉
- 子ども・青年期から大人期へのそれなりに安定した成長（男性）

2) 不安定雇用下で余儀なくされる「総稼ぎ手モデル」の進行  
《誕生→学校→不安定雇用→死》 という不安定な人生モデル

- 終身雇用の廃止（雇用の流動化） = 不安定雇用
- 能力主義 = 成果主義に基づく給与
- 自己責任にもとづく自己教育（Off the Job Training）
- 企業内福利厚生の廃止 = 自己責任に基づく自己保障
- 男性 = 仕事、女性 = 家事・育児 + 非正規の〈仕事〉 ⇒  
「総稼ぎ手モデル」の進行
- 非正規の増加の下での非婚・未婚の増加

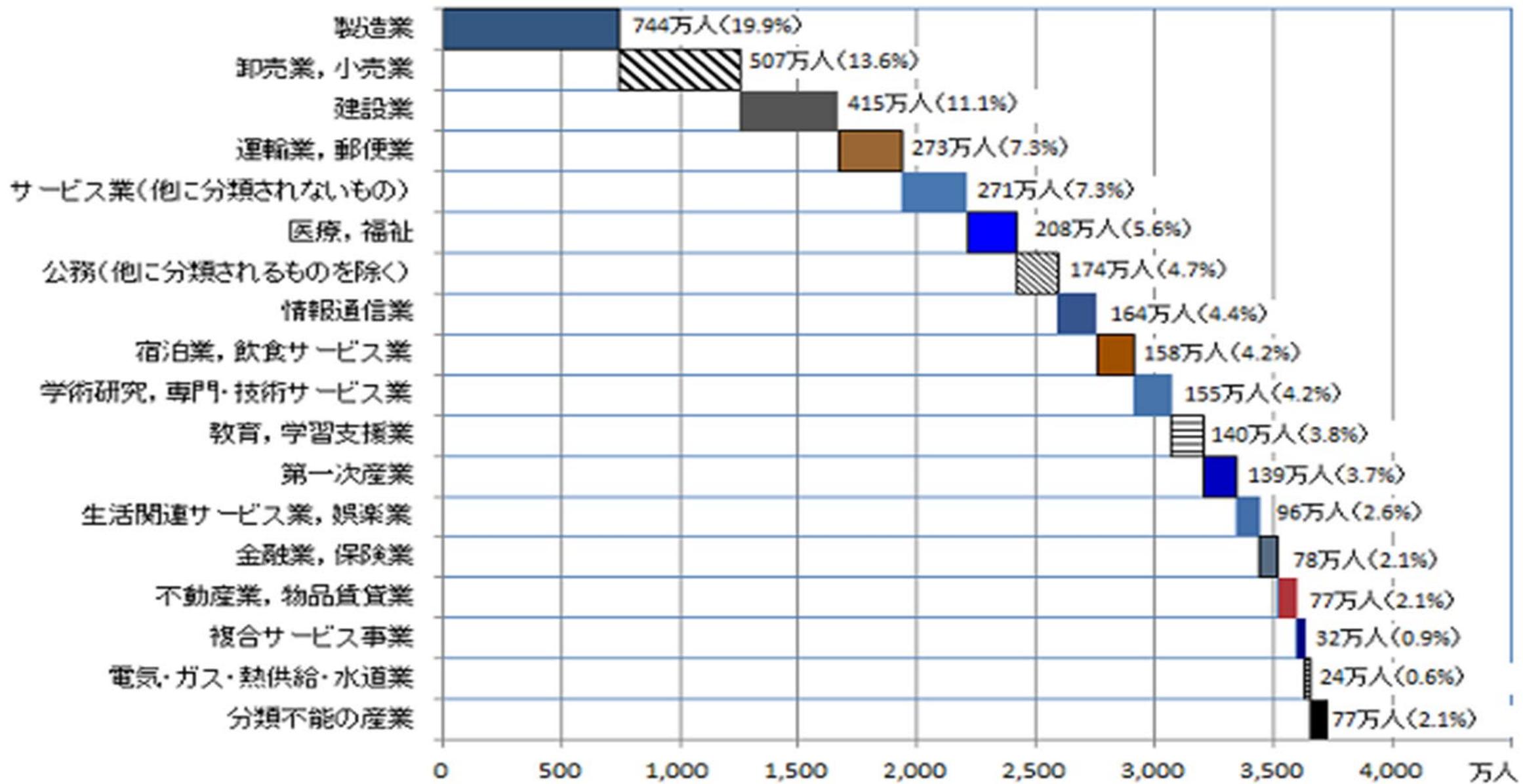
### (3) サービス産業化と求められる男性の能力

#### 1) サービス産業についている男性の増加

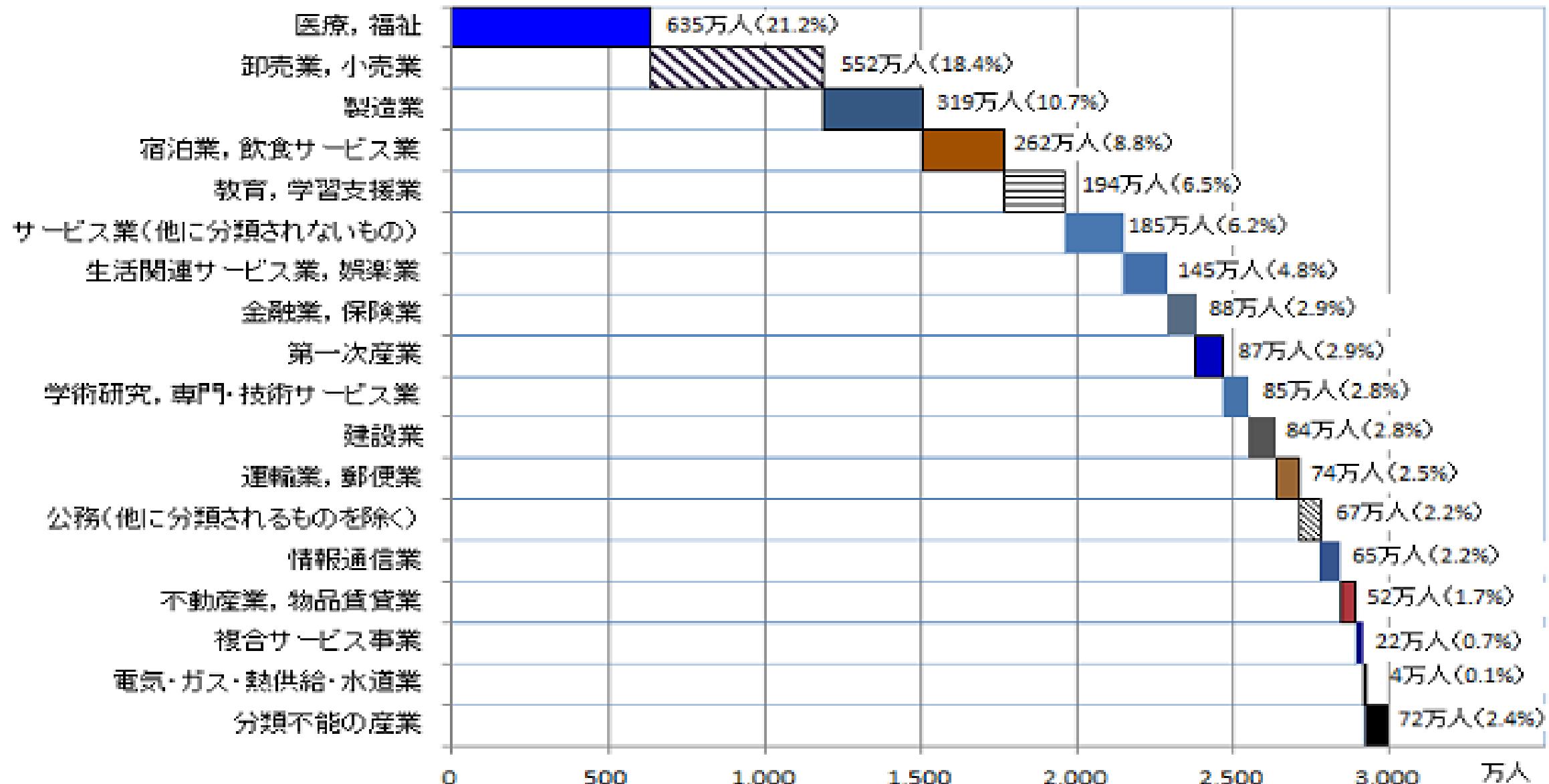
1987年から2019年にかけてサービス産業に従事している男性の推移をみると、8.8%から37.5%に増えている。（女性は57.8%）

- ビジネスサービス（金融・保険・不動産業、学術研究、専門・技術サービス業） 3.2% → 8.4%
- 消費者サービス（宿泊業、飲食サービス業、生活関連サービス業、娯楽業） 0.7% → 6.8%
- 社会サービス（医療、福祉、教育、学習支援業） 0.7% → 9.4%
- 公務 0.4% → 4.7%
- その他サービス業（サービス業、複合サービス業） 3.8% → 8.2%

これに卸売業・小売業を加えると、16.6%から51.1%へ



- ・ 産業別就業者数 (男性、就業者数計 = 3,733万人、2019年平均)
- ・ <https://www.jil.go.jp/kokunai/statistics/chart/html/g0004.html>



産業別就業者数（女性・就業者数計=3,733万人、2019年平均）

## 2) 男性に求められる能力と所作

男性中心の男性だけの「ホモソーシャルな」社会から男女混成の社会になり、

① 男性間では通用してきた感情の抑圧といった感情規則はもはや通用しなくなり、もっぱら女性に求められてきた、社会的に好感が持たれるように自らの感情表現を訓練・コントロールする「感情労働」が、男性にも求められる。

これまでどちらかというと女性に求められてきた性質、すなわち、コミュニケーション能力やチームワークの才能、サービス精神、高い社会的コンピテンス（社交能力）が、ますます男性にも求められてくる。

② また顧客に応じて臨機応変に対応する能力が求められる。

③ 顧客に好感を持ってもらえるように、マッチョな振る舞いではなく、つねに清潔感にあふれ、会話や身だしなみやセンスにもフェミニンな気配りをしなければならない。いわゆる「メトロセクシュアル」なあり方が男性にも求められる。

## (4) 今日求められるマスキュリニティとその矛盾

### 1) 「フレキシブル・マスキュリニティ」の特徴

- その柔軟な思考と対人能力－さまざまな問題に柔軟に対処するだけではなく、対人関係においても感受性と思いやりをもった対応ができるなくてはならない。もちろん、それは、企業が「人的資本」として利用・榨取するためのものでしかない。
- たえず自己責任を負う(あるいは負うことができる)強い男性

ここで求められているのは、他者との競争の中で「自己責任のもとで主体的に行動すること」（経済同友会教育委員会「若者が自立できる日本へ～企業そして学校・家庭・地域に何ができるのか～」2003年4月）のできる強い男性であって、他者と協力・共同する男性ではない。また、もっぱら社会へ適応できる能力であり、既成の社会ルールを身につけ公共に奉仕する個人である（同上）

## 2) マスキュリニティの二極化

- エリートの子どもに対しては、「確かな学力」を身に付けさせると同時に社会の秩序と規律という道徳を植えつけ、その上にさらに国際的能力（グローバル・リテラシー）を身に付けさせていく。この子どもたちに対しては、「主体的に問題を発見し、設定し、解決に導くことのできる能力」が求められる。⇒「グローバル・マスキュリニティ」あるいは「トランスナショナル・マスキュリニティ」
- 成績・能力の低い者には、「基礎・基本」（これさえもあやしい）と社会の秩序と規律という道徳を身に付けさせればよい。市場社会の規律やゲーム規則を守らせ、そこからけっして降りない勇気や気概が求められる⇒「市場主義マスキュリニティ」

### 3) 今日のマスキュリニティの4つの要素

- フレキシブル・マスキュリニティー今日「ヘゲモニー的マスキュリニティ」
- 市場主義的マスキュリニティ
- メトロセクシュアルないしはビジュアル・マスキュリニティ（ジャーブ系男性）
- 筋肉マッチョ（K-1やEXILEか）

もっとも、この4要素は必ずしもそれぞれ独立してあるわけではなく、相互に覆いかぶさつたりもする。

## 4) これらのマスキュリニティが抱える矛盾

- 企業は、能力主義・成果主義・競争主義をますます男性社員に強いると同時に、対人関係や問題に対して高度なフレキシブルな対応能力をも求める。
- フレキシブルさだけではなく、さらに適正な感情表現やコミュニケーション能力も瞬時に求められる。筋肉質的な体型でハードな競争的労働を長時間こなすと同時に、フェミニンにかつフレキシブルに人とも対応しなければならない。
- 親密な関係においても、ケアレスなのに当然子育てや家事を求められる。
- 男性はこうした多様な要求に直面して右往左往しており、そのなかで「マスキュリニティ」を生きていかなければならない。

## 5) きわめて不十分な男女共同参画社会基本法の下の女性の社会的進出に対する男性側の対応

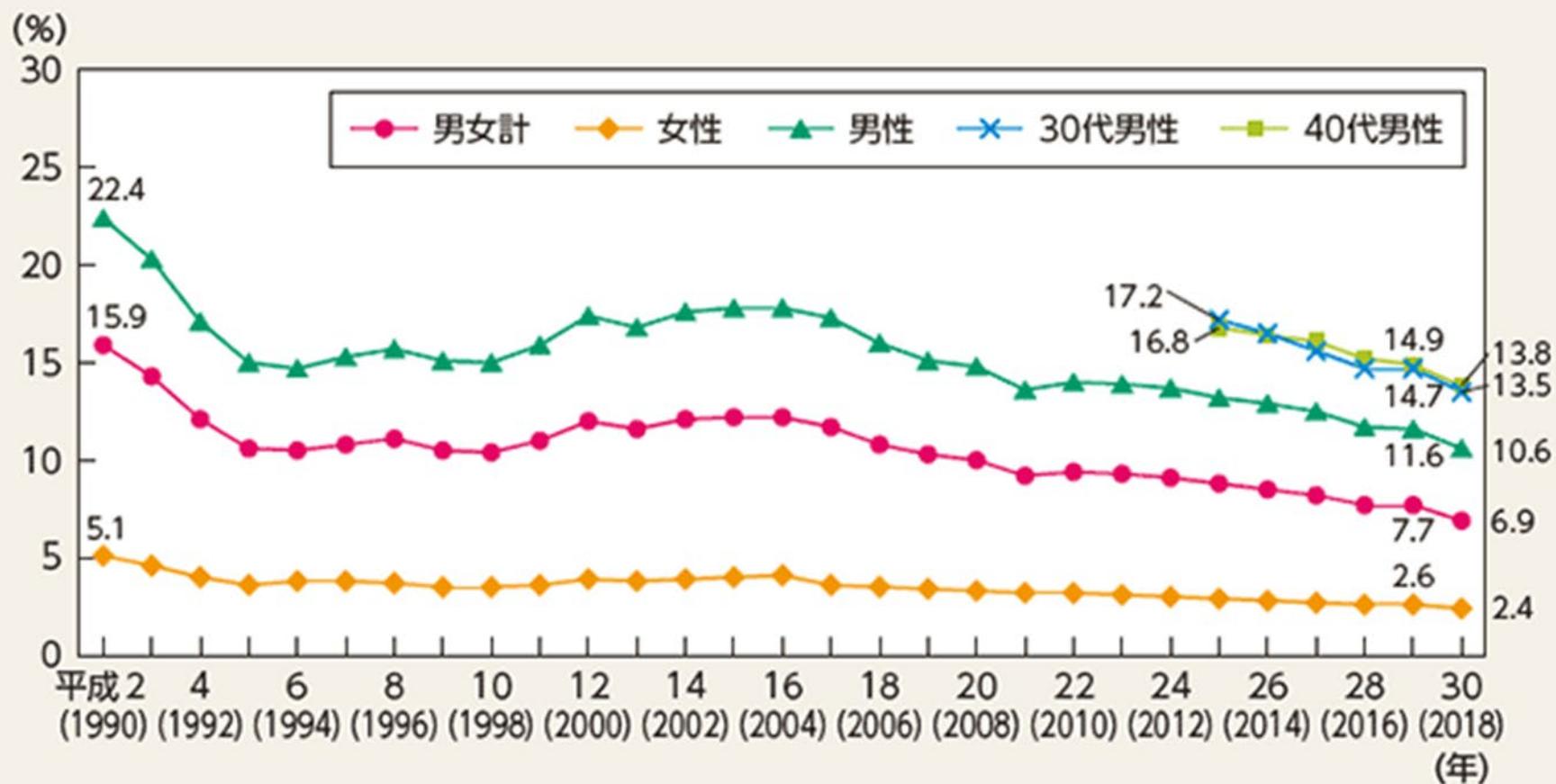
- 男性の既得権に対する不安や怯え
- 「権利の不当な剥奪感」  
こうした一部の男性側の怯えが、
- 男性の方こそ損していると、女性を攻撃したり（インターネットの女性専用車両や乳母車を車内に持ち込む女性への攻撃）
- 「元気」とみえる女性にルサンチマンを抱いたり、
- 突出した女性へのバッシングを行ったりする。

# 4. 男性の自立を妨げる社会構造

## (1) 子育て・教育における「男性なき社会」—母子関係の濃密化

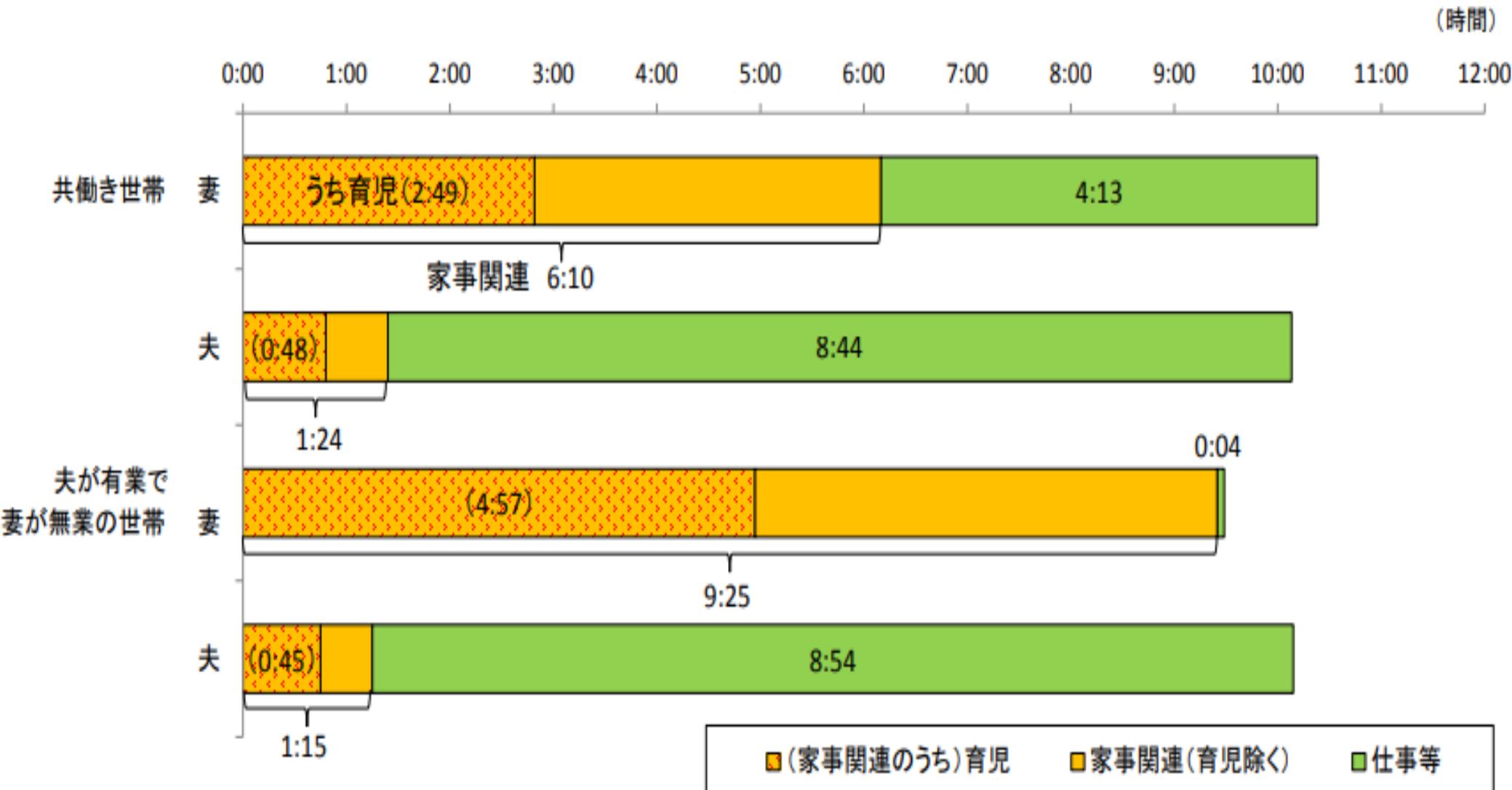
- 1) 子育て期の30代前半の男性の長時間労働が子育てへの参加を物理的に妨害 ⇒ 「24時間のコンビニを一人で切り回す」生活
- 2) 子どもの社会的ケアシステムが脆弱な中で、母親が一人で子どものケアをしなければならない—産後ケアの脆弱さ
- 3) 女子よりも男子に対する教育期待の高さ ⇒ 「元気な女子」と「おとなしい男子」
- 4) 子どもの親離れを妨げる男子優遇 ← 若者の親離れを妨げる教育費と住居費の高さ  
こうした結果、日本では母と男子の母子関係がますます濃密化し、男性は社会的再生産から排除される。

I-3-1図 週間就業時間60時間以上の雇用者の割合の推移 (男女計, 男女別)



(備考) 1. 総務省「労働力調査(基本集計)」より作成。  
 2. 非農林業雇用者数(休業者を除く)に占める割合。  
 3. 平成23年値は、岩手県、宮城県及び福島県を除く全国の結果。

【図表 6歳未満の子どもをもつ妻・夫の家事関連(うち育児)時間、仕事等時間(週全体平均)】



「平成28年社会生活基本調査」の結果から

【図表 6歳未満の子どもをもつ夫婦の育児・家事関連時間(1日当たり)—国際比較—】

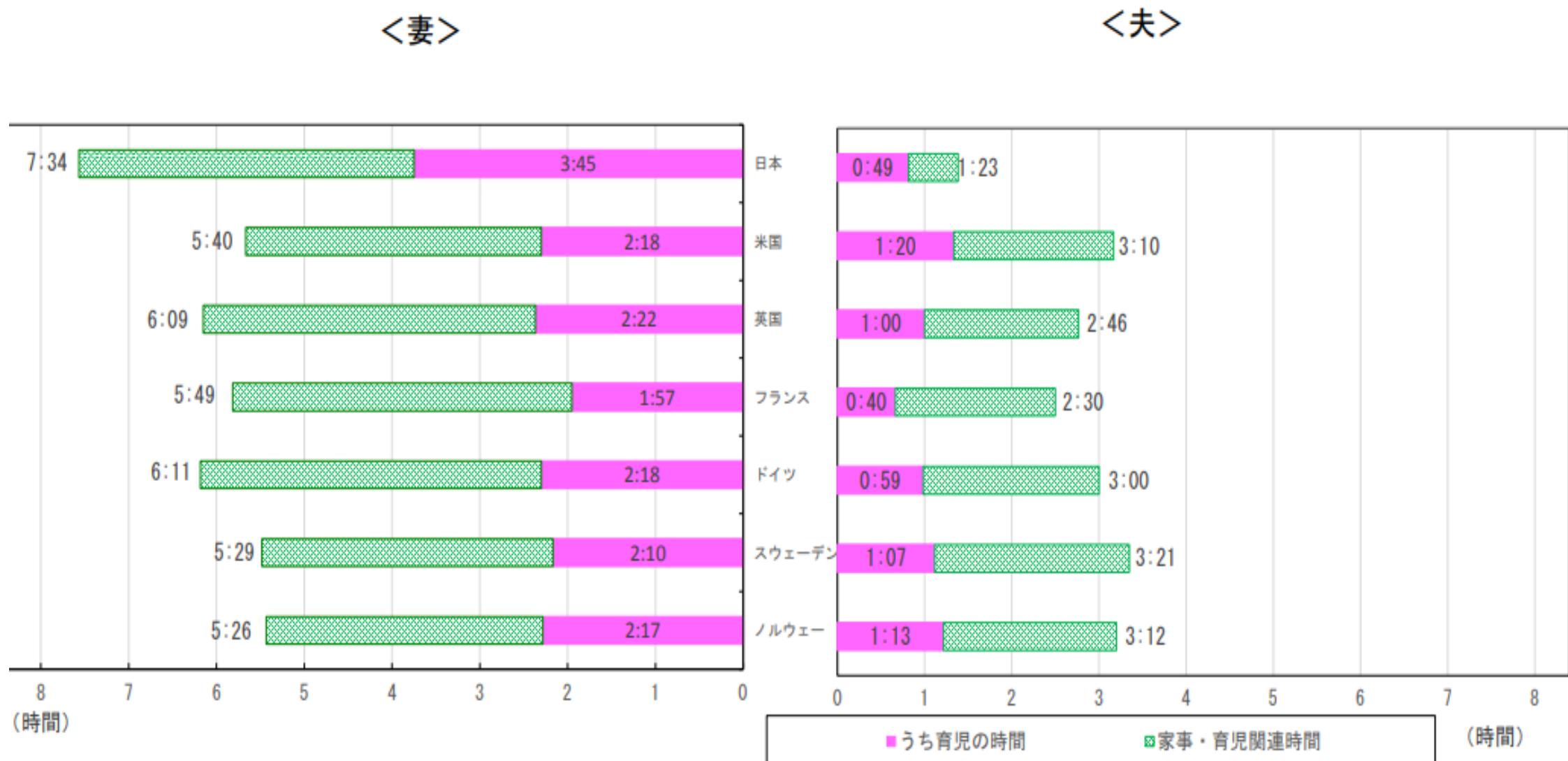
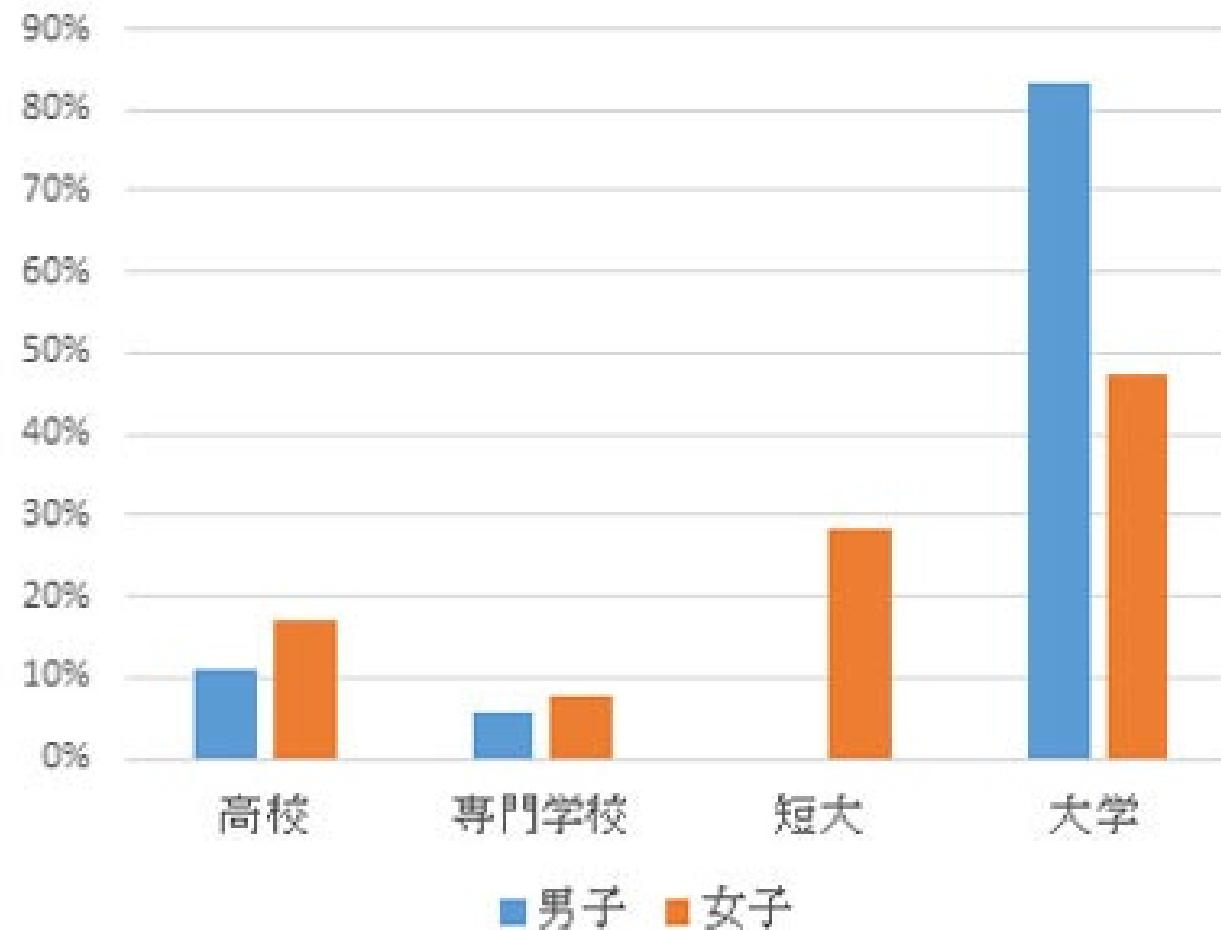


図2. 子どもの性別と母親の学歴期待



山本洋子・渡辺友季子「ジェンダー・ギャップ再考：日本の母親  
は子どもの教育・仕事・将来をどうみているか？」  
<https://www.blog.crn.or.jp/report/02/225.html>

2019年度 大学等進学者数・進学率 (通信等除く)

	卒業者数	大学等進学	大学 (学部)	短期大学(本科)
女子	519,975	300,392	57.8	255001 49.0
男子	530,584	273,916	51.6	268,465 50.6
全体	1,050,559	574,308	54.7	523466 49.8

## (2) 保育・初等教育における「男性なき」社会

初等教育機関におけるケアする「男性不在」

保育所だけでなく、幼稚園でも94%が女性であり、小学校では62%

- 女性養育者が多数を占める保育園・幼稚園や小学校ではケアする男性モデルが不在
- 「男子・女子」という区別化が子どもたちを統制するために頻繁に用いられ、〈きちんとしている—だらしない〉 〈おりこうさん—おばかさん〉 〈静かな—乱暴な〉 〈素直な—わがままな〉 といった対の言葉で、子どもたちは評価される。
- しかし、ここで求められるプラスの行動様式は、女子に日常的に求められているものだから、女子は男子よりも容易にそうした「ジェンダー環境」に融け込むことができ、女性たちから受容され承認される経験を多くもつことができる。

## 2019年度学校教員数及び男女比

	計			園長or校長			副校(園)長			教頭						
	計	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女					
幼稚園	93,579	6,193	87,386	93%	3,260	4,741	60	654	2,425	79	102	1,373	93			
幼保連携型認定こども園	109,515	5,787	103,728	95	1,955	3,064	61	672	2,545	79	53	485	90			
小学校	421,935	159,658	262,277	62	15,185	3,930	21	1,320	590	31	13,152	4,874	27			
中学校	246,825	139,346	107,479	44	8,427	676	7	950	176	13	8,152	1,254	13			
義務教育学校	3,520	1,651	1,869	53	86	7	8	52	15	16	123	41	25			
全日制・定時制高校	231,319	156,633	74,686	32	4,332	384	8	1,186	117	9	5,621	626	10			
通信制高校	4,880	3,062	1,818	37	83	16	13	79	6	7	227	34	13			
中等教育学校	2,642	1,724	918	35	43	3	7	28	5	15	64	7	10			
特別支援学校	85,336	32,748	52,588	62	773	231	23	216	90	29	1,024	451	31			
総計	1,199,551	506,802	692,749	58	34,144	72	13,052	28	5,157	46	5,969	54	28,518	76	9,145	24

○ これに対して男子は「男の子らしさ」を求めるメディア文化の下でそれを実現しようとすれば、女子より行儀が悪い乱暴な子として、教師や親からもマイナスの評価を受けがちとなる。

しかも、子ども期の教育機関では男性が少ないために、男子の相談に乗り、男子の不安をきちんと受け止め付き合ってくれるような男性が周りにはいない。

○ こうした中で、男子が男女の区別化の中で「男子」というアイデンティティを確立するためには、一方でマイナス評価とされる「男子らしさ」を内面化しなければならず、しかし同時に他方では、自分の中にあるプラス評価とされる「女の子らしさ」をたえず否定し排除し抑圧するという二重の作業が必要となる。「女性的なもの」をたえず排除することでしか、「男子」になることができない。だから行動においても、女性を排除しがちになる。

### (3) 「男性的」環境としての中学校・高校で強化されるジェンダーの強化

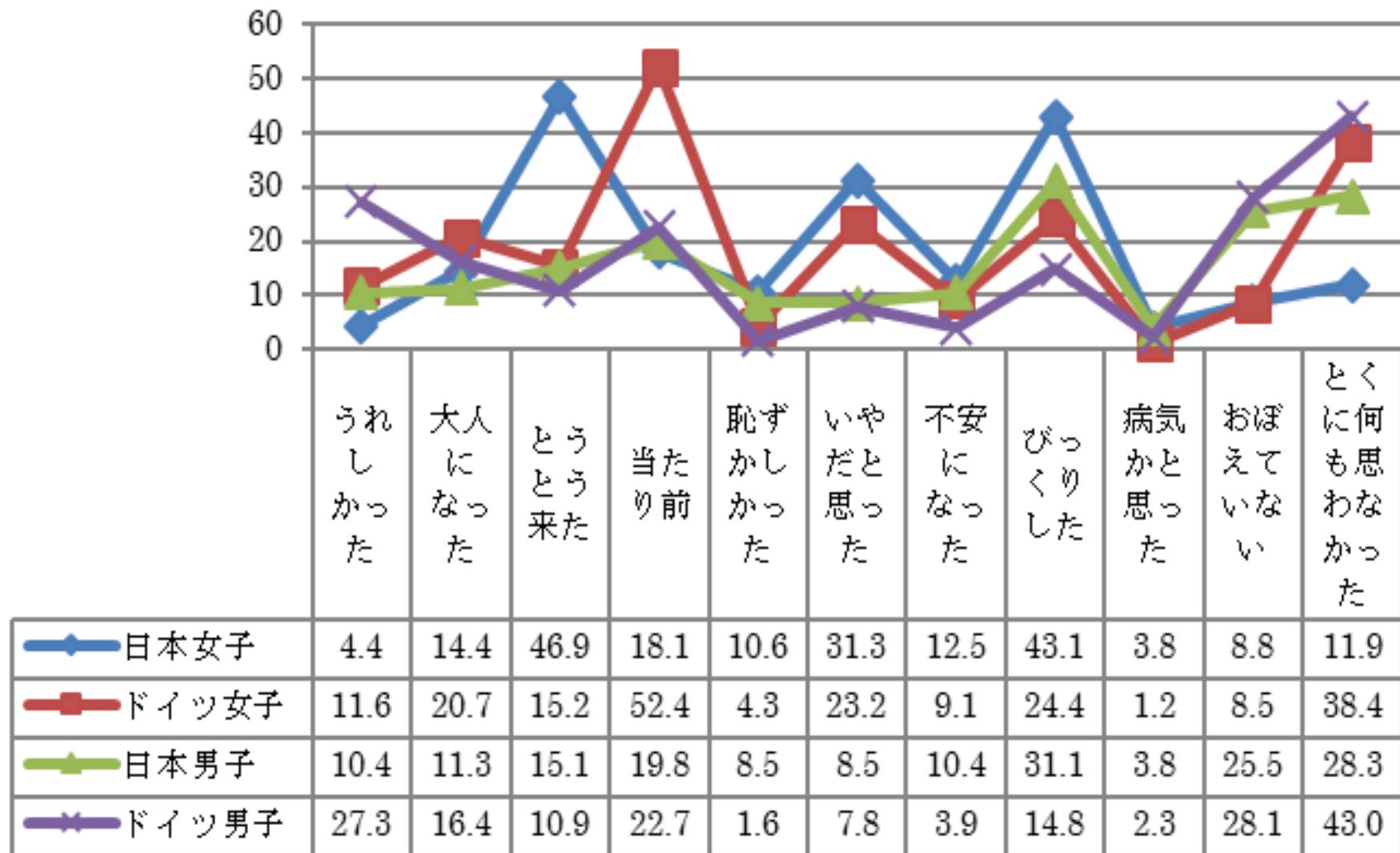
- 校則等で「男らしさ」「女らしさ」などジェンダーがいっそう強化される
- 能力主義的競争や個性化競争が一層加速化される。
- こうしてマスキュリニティが一気に「解放」され、男子の自尊心は、他者との競争に勝つという「能力に基いた自尊心」（テレンス・リアル 2000）へと歪められ、そこに自らのアイデンティティの拠り所を求めがちとなる。
- 男性教員の「力」の支配する中等教育の世界では、それ以外の男性を知らず、他者支配かさもなくば他者服従かの「権力の世界」を生きることになる。
- 男子はここでは、学校・社会が求める「男性的なもの」（業績と「男らしい」スポーツ精神等）を受容することと自分の「人間性」とを折り合わせることに、それほど苦労しない。勉強やスポーツで競争的世界へ入り込みそこで競争することは、自分の「人間性」とは矛盾しないし、その延長線上で自分の将来の仕事を考えさえすればよい。
- しかし、そうだからこそかえって、たえず「男性的なもの」への強迫観念が付きまとう。競争で負けることはダメな男（=人間の敗北）ともなるのである。

## 4. セクシュアリティに対する不安とマスキュリニティの強化

### （1）性的身体との否定的な出会いと付き合い

- 1) 性が「きたない」（「きたない」「どちらかといえばきたない」の合計）と思う男子が中学校72%（女子77%）、高校で71%（女子78%）と、女子とほぼ同じ（日本性教育協会編2019）。
- 2) 近年男子の精通との出会いも、女子と同様否定的である（図表1）。
- 3) 思春期男子の性的身体に関する悩み。
  - ペニスの大きさに関する悩み）、○包茎の悩み、○マスタベーションに関する無知と悩み

図表1 精通観・初経観



## (2) 性知識の乏しさ

- 1) 橋本他 (2011) の全国中学校生徒調査によれば、
  - ① 男女とも、誤答よりも「わからない」と回答する者が多いが、全26項目の平均正答数は男子 $8.97 \pm 6.63$ 問 (34.5%)、女子 $10.25 \pm 6.01$ 問 (39.4%) と男女とも低いが、男子の正答率が女子と比して有意に低い。
  - ② 正答率が低い項目は、男子では「月経周期」「排卵」「帯下(おりも)」「卵子」など女性の生殖機能に関する項目や、DV」「妊娠中絶」などの項目が10~20%台であるのに対して、女子では「精子」「卵子」「帯下(おりも)」「DV」などが10~20%台である。このように、男子に限って見れば、男子は女子よりも全体として性の知識が低いだけでなく、自分の身体の生殖機能や女子の生殖機能についての知識も低い。

## 2) 日本学校保健会『保健学習推進委員会報告書—第3回全国調査の結果—』（2017年2月、2015年11～12月実施）

- ①「思春期には、男子では初経、女子では精通という現象が起こる」、
- ②「思春期の変声や発毛などの体の変化は、ホルモンの働き（作用）によって起こる」、
- ③「エイズは、咳やくしゃみでうつる」の3項目を保健知識調査の一部として聞いている。

その結果を見ると（図表5）、①②に関する正答率は女子の方が有意に高い。しかも「わからない」という回答も男子の有意に高くなっている。ただし、③のみは逆に男子のほうが有意に高くなっている。

図表5 性に関する知識 (%)

	学年	男子		女子	
		正答率	わからない	正答率	わからない
思春期には、男子では初経、女子では精通という現象が起こる	小5	20.7	36.9	24.5	22.9
	中1	46.7	28.7	63.1	15.9
	高1	62.4	21.8	78	13.1
	高3	71.7	12.8	85.8	6.5
思春期の変声や発毛などの体の変化は、ホルモンの働き（作用）によって起こる	小5	53.9	39.1	66.1	30.5
	中1	72.1	24.6	80.6	17.2
	高1	84.4	12.1	89	9.4
	高3	87.4	9.4	91.4	7.1
エイズは、咳やくしゃみでうつる	小5	11.4	62.8	8.9	69.7
	中1	30.8	42.8	27.6	44.4
	高1	79.5	10.5	78.1	11.4
	高3	80.8	10.8	83.8	9.3

### (3) 性情報源としてのインターネット、アダルト動画

アダルト動画を見たことのある中学男子は5人に1人、高校男子で2人に1人

#### 1) 「性交」に関する情報源

図表9 「性交」に関する情報源

位	中学		高校	
	男子	女子	男子	女子
1位	友人や先輩 53.4(54.7)	友人や先輩 41.4(51.4)	友人や先輩 63.5(65.6)	友人や先輩 57.3(50.7)
2位	学校（先生、授業や教科書）21.4(29.8)	マンガ/コミックス 23.1(34.3)	インターネットやアプリ、SNSなど 39.6(44.2)	学校（先生、授業や教科書）41.4(35.3)
3位	インターネットやアプリ、SNSなど 19.8(20.7)	学校（先生、授業や教科書）22.9(36.6)	アダルト動画（DVDやネットなど）34.3(14.9)	インターネットやアプリ、SNSなど 28.4(23.0)
4位	マンガ/コミックス 14.9(15.1)	インターネットやアプリ、SNSなど 22.7(19.5)	学校（先生、授業や教科書）33.7(26.1)	マンガ/コミックス 24.5(21.2)
5位	アダルト動画（DVDやネットなど）12.3(4.9)	親やきょうだい 7.3(6.4)	マンガ/コミックス 18.0(17.5)	付き合っている人 15.0(13.6)

日本性教育協会 2018 より筆者作成。() 内は 2011 年第 7 回調査

## 2) 「避妊」に関する情報源

図表 10 「避妊方法」に関する情報源

位	中学		高校	
	男子	女子	男子	女子
1位	友人や先輩 21.7(17.6)	友人や先輩 17.9(21.8)	学校（先生、授業や教科書） 63.5(52.0)	学校（先生、授業や教科書） 69.8(59.8)
2位	学校（先生、授業や教科書） 15.4(18.3)	学校（先生、授業や教科書） 14.7(20.2)	友人や先輩 34.0(39.3)	友人や先輩 33.6(30.6)
3位	インターネットやアプリ、SNSなど 11.3(8.2)	インターネットやアプリ、SNSなど 14.6(8.6)	インターネットやアプリ、SNSなど 25.3(21.6)	インターネットやアプリ、SNSなど 18.0(12.7)
4位	マンガ/コミックス 5.5(5.0)	マンガ/コミックス 8.8(15.1)	アダルト動画（DVDやネットなど） 8.5(0.7)	親やきょうだい 9.6(6.7)
5位	アダルト動画（DVDやネットなど） 4.4(2.2)	親やきょうだい 7.3(4.3)	親やきょうだい 5.4(3.6)	マンガ/コミックス 9.4(8.9)

日本性教育協会（2018）より筆者作成。

### 3) 学習教材としてのポルノ雑誌・アダルト動画

池谷他（2017）の高校生調査では、「性交といった性行動が見られるポルノ写真やアダルトビデオ」の経験について、男子では、

- ①「興奮した」（48%）
- ②「勉強になった」（34%）と肯定的に答えているし、
- ③「楽しいと思った」も一八%いる

（もっとも「嫌だと思った」「見たいとも思わなかった」という否定的な層も18%いる）。

この結果からも、かなりの男子はポルノ写真やアダルトビデオから性を学習していることが窺える。

## (4) LGBTに対する消極的態度

①「同性どうしの結婚は認められるべきだ」、②「同性と性的行為をすることがあるべきでない」という意見に対する中高校生の態度（性教育協会編2019）について

1) 2つの問い合わせに対する「わからない」層が中高男子では30%を超え、女子よりも多い。

2) 肯定群（「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の合計）と否定

群（「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の合計）をみると、

①の問い合わせ 中学女子：肯定群50%>否定群25%、

高校女子：肯定群60%>否定群16%

中学男子：肯定群34% = 否定群34%、

高校男子：肯定群41%>否定群26%

②の問い合わせ 中学女子：肯定群33%>否定群31%

高校女子：肯定群45%>否定群25%

中学男子：肯定群24% <39%

高校男子：肯定群32% <否定群36%

男女とも中学高校へかけて肯定群が増えるものの、男子の方が女子よりも同性愛に対してより否定的である。

## (5) 伝統的ジェンダー規範へのとらわれ

1) 「男は外で働き、女は家庭を守るべきだ」という伝統的な性別役割分業についての否定意識

中学：男子54% < 女子59%、

高校：男子57% < 女子64%

2) 「男の子は男らしく、女の子は女らしくあるべきだ」に対する否定意識

中学：男子35% < 女子53%

高校：男子45% < 女子60% (性教育協会編二〇一九)

## (6) セクシュアリティとジェンダーの相補原理

しかし男女関係となると、女子の方が男子よりも伝統的なジェンダー規範にとらわれている。

- 1) 「男性は女性をリードするべきだ」という意見を肯定する男子は中学65%、高校64%に対して、女子は中高ともに69%（性教育協会編2019）。
- 2) 「女子の方が積極的にリードするのを男子は好まない」という意見に肯定する高校女子38%>男子21%
- 3) ここにはマスメディアにおいて流される「男性にもてるしさや服装」など伝統的女性像が影響を及ぼしていると考えられる。
- 4) 男女の相互関係のなかでセクシュアリティ・ジェンダーが相補的に強化され合う。

# おわりにーなぜ男性をとりあげるのか

- (1) ジェンダー平等を実現していくためには、男性自身が現在の状況を「自分一身上の問題」として受け止める必要がある。
- (2) 男性が得る「ジェンダー秩序利益配当」だけではなく、同時にそのために彼らが被る「被害性」についても目を向けなければならぬ。⇒ 《トラブルメーカー》としての男性像から、《トラブルを抱える者》としての男性像への転換
- (3) 今大事なことは、女性との対話を通じて、あるいはLGBTIQの人々などとの対話を通じて、お互いが被っている被害や加害を率直に語り合うことをとおして、
  - ①お互いの状況を理解しあうこと、
  - ②新しいジェンダー規範を模索しながら、お互いに安心して生きることができるジェンダー平等なホームと社会を構想していくこと、が求められます

## 参考文献

- Rutgers (2016). Adolescent Boys and Young Men – Sexuality and Relationship.
- UNESCO (2009). International technical guidance on sexuality education. Vol. I – Rationale for sexuality education. Paris. = 2017 『国際セクシュアリティ教育ガイドンス』 浅井春夫・良香織・田代美江子・渡辺大輔訳、明石書店。
- ギーザ、R. 2019 『男の子はなぜ「男らしく」育つか』 富田直子訳、DU BOOKS.
- 橋本紀子・池谷壽夫・田代美恵子編著2018 『教科書にみる世界の性教育』 かもがわ出版
- 池谷壽夫2009 『ドイツにおける男子援助活動の研究 その歴史・理論と課題』 大月書店.
- 池谷壽夫2006 「今なぜ男性が「問題(トラブル)」なのか?—男性のジェンダーとセクシュアリティをめぐって」、『唯物論研究年誌』 (唯物論研究協会機関誌) 第11号, pp.139-168
- 池谷壽夫他2019 『国際水準に基く教科書・教員養成課程の分析および性教育プログラム開発に関する研究 研究成果報告書』 (二〇一六~二〇一八年度日本学術振興会科学研究費 基盤研究 (B) 課題番号 16H03768、研究代表者：池谷壽夫) .
- 池谷壽夫・茂木輝順・加野泉 (2017) 『日独性教育比較に基いた、性教育における男子支援に関する研究 研究成果報告書 平成24~28年度日本学術振興会科学研究費 基盤研究(C) 課題番号24531031』
- 池谷壽夫・市川季夫・加野泉編著2016 『男性問題から見る現代日本社会』 はるか書房
- 池谷壽夫他『大人になる前のジェンダー論』 はるか書房
- ジンバルドー、P. /クーロン、N. 2017 『男子劣化社会 ネットに繋がりっぱなしで繋がれない』 高月園子訳、晶文社.